

歴史資料を集めて読み解くこと(2)

仲泊の「唐人墓の墓碑」

恩納村史「歴史編」専門委員 川島 淳

「恩納村史編さんだより 68」(2019年9月号)で、私は、恩納番所とその周辺の光景を例として、恩納村の歴史を描くために歴史資料を組み合わせることの重要性について書きました。今回は、仲泊の「唐人墓の墓碑」と文書資料から判ることについて述べます。

仲泊にあった唐人墓そのものは、米軍の旧県道路路拡張改修工事で消失したため、現在の墓碑の下にある台座には、遺骨は収められています。他方、墓碑は戦後に3度盗まれましたが、時間が経つと戻されていたそうです。墓碑には、次の文字が刻まれています。

福建省泉州府同安縣難民□□水櫃飄来
呂 仁
呂 春
呂 孝
呂 貴
洪 明
清 考
胡 明
道光四年十二月初六日立



恩納村博物館駐車場の側に移された唐人墓の墓碑

この墓碑は、1824(道光4)年12月6日に、墓とともに建てられたことがわかります。一行目の□□は判読不能ですが、仲松弥秀先生は、「餓死」の文字があったと推察しています。これに基づきますと、この墓は、福建省泉州府同安県の難民で、水桶に乗ったが、餓死の状態で漂着した呂仁と呂春、呂孝、洪貴、胡明などの墓であるということが記されています。この碑文を見ていると、墓碑を建てた人物は誰なのか、なぜ葬られた人物の名前や出身地が判明したのか、なぜ水桶で漂着したのかといったことが疑問として浮かびます。この疑問から、文書資料を探すと、次のことが判明します。

1824(道光4)年に、呂正は、32名とともに商船1隻で福建省泉州府同安県を出港し、清国内の天津や山東に立ち寄りました。福建省に戻る際に、暴風に遭ったため船が沈没しました。26名が溺死しましたが、呂正など6名は水桶に乗って避難しましたところ、恩納間切仲泊村に漂着しました。5名はすでに死亡していました。この地において、納棺して埋葬し、墓碑を建てました。呂正だけが餓死寸前の状態で発見され、救助されました。呂正は粥で療養し、蘇生しました。その後、泊村(那覇市泊)に移送され、翌年1月11日に、大通事の紅泰熙は、福建省泉州府同安県の遭難者呂正を清国へ護送するように命じられ、4月19日に那覇を出発しましたが、暴風によって舵が破損したので、22日に一旦引き返しました。9月11日に再び那覇を出港し、16日に福建省長樂県に到着しました。諸手続を経て、10月1日に、呂正を送り届けるという公務を完了しました。翌年5月に帰国しました(「中山世譜」蔡温本・「歴代宝案」第2集第140巻・「紅姓家譜」)。この事実に基づきますと、生存者によって餓死者の名前と出身地が判明したのでしょう。

これらのことは、さまざまな文献に記載されていますが、今回広報誌で改めて取り上げたのには、理由があります。恩納村史「歴史編」専門部会で、近世琉球期に作成された家譜資料から、恩納村関係記事を抽出しています。これにつきましては、輝広志「家譜」に見る恩納間切の検